
—ヨーク・ラブストーリー/エピソード17:愛はいつでも突然に(Crazy For You)

栗須じょの

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ニコ-マーク・ラブストーリー～Hピソード17・愛はいつでも

突然に (Crazu For You)

【ZPDF】

N3054H

【作者名】

栗須じょ

【あらすじ】

長年別れて暮らしていた父親、エドセルがマンハッタンにやつてきた。初めての父親訪問に、ディーンはぎくしゃくとぎこちない雰囲気。何とかうまくやろうと努力を重ねているところへ、ローマンがとんでもない発言をする。「あなたのお父様、とてもすてきね。あたし彼に一目惚れしちゃった！」百戦錬磨のローマンに父親を狙われ、ディーンの疲労は一割増一奇妙な恋の攻防はいつたいじこに辿り着くのか？

(前書き)

いわば 一話完結のシリーズ物 につき、ヒプノーシード第1話から
お読み頂けると分かり易いと思います。
連載はまだまだ続きますが、本作品においては完結しています。

人の心は複雑怪奇だ。

赤ん坊の頃は誰でも素直で、欲しいものは欲しいと（それはミルクとかオムツとか、ごく単純なものが）ハッキリ主張していた。しかし大人になるにつれ、人間の感情は複雑さを増してくる。好きなのに諱めてしまったり、嫌いなのに愛想良くしたり。そんなことをしても事態は少しもよくならないとわかつていながら、多くの人がこのややこしい不思議なゲームに参加し、プレーしている。『素直がいちばん!』などと口では言つものの、それは所詮タテマエに過ぎない。特にこのマンハッタンでは、本心といつもの巧妙に隠されている場合が往々にしてある。

以前、おれが付き合っていた女性、シャーロット＝アンとの間にこんなことがあった。

「トーマスが一緒にコンサートに行かないかって言つの」と彼女は言った。「クラシックの合唱がマーキン・コンサート・ホールであるからつて」

「それで?」と、おれは聞き返す。「きみは行きたいの?」「ちなみにおれは合唱など趣味ではない。

「ええ……そうね」彼女はこのとき、確かに頷いてみせた。

トーマスはおれたちの共通の友人だ。おれにとつては“知人”程度の存在の彼が、シャーロット＝アンを狙つてているのは前々から知つていた。いたが、おれはこの件に関して取り乱すことはしなかつた。トーマスは彼女よりずっとチビだつたし、おれとシャールの関係はうまくいっていたからだ。

「別にコンサートに行くだけだろ? いいよ、行つておいで」

おれは大人の男として、寛大な態度を示したつもりだった。しかしシャーロット＝アンはそれを聞いて顔色を変えた。

「どうしてそんなことが言えるの? わたしのことが心配じゃない

の？』

「心配？ 心配なもんか」 おれは優しく彼女の髪を撫で、言った。
「おれはきみを信用してる。たとえ誰と出かけても不安になんて思
うわけがない』

それはおれにとつて、最大の贅辞のつもりだつた。こつちは彼女
との愛を疑つていない。チビのクラシックオタクとシャールが出か
けたところで、何の問題があるだろ？ もし彼女がそうしたいと
いうのであれば、おれはそれを止めたりはしない。『行くな』だな
んて命令するのは、彼女の不貞を疑うも同然だからだ。

その出来事から一週間後、シャーロット・アンはチビのクラシッ
クオタクと付き合い始めた。のちに彼女の友人、ベッカが言つてい
たのは「シャールはあなたのこと試したのよ」ということ。『あ
の子はあなたに“行くな”って言つて欲しかつたんだわ』

「なんだそれは？ だつて彼女はコンサートに行きたいって言つた
んだぜ？ その望みを阻んで、束縛して欲しかつたって言つのか？』
「ディーン」 ベッカは頭を軽く振つて言つた。

「あなたつて女心をわかつてないのね』

こんなややこしいものが一般的な女心というならば、すべて男は
心理学を専攻すべきだと思う。では男心が簡単かと言えば、それも
またそうでもない。男は意地つ張りで強情な部分がある。どうして
もセックストしたいのに、そうじやない振りをしてみせたりなどが、
いい例だ。（しかしながら、これを素直に表現するとなると、裁判
沙汰にもなりかねないため、『そうじやない振り』というのは、社
会的に必要なアイテムなのかもしれない）。

とにかく人間というのは複雑なもの。ときには自分自身の本心す
らもおぼつかないのに、他人の、ましてや“女心”を解き明かせと
いうのは、そう簡単なことじゃない。

では“ゲイ心”についてははどうだ？ こいつはなかなか興味
深いところだ。おれが認識する限りでは、彼らは男ほど頑固ではな
く、女ほど複雑ではない。自分のアイデインティティを認め、それ

を解放したゲイたちは、思うがままに生きている。似合う似合わないに関わらず、好みの服を身につけ、落ちる落ちないに関わらず、好きな相手に突進する。これはあくまでおれから見た彼らのことだ、一般的な認識とはまた違うかもしれないが、少なくともマンハッタンの一部社会には、確実にこうした生物が存在するのだ。

「あの子つたら本当に素敵。もう食べちゃいたい」

「こないだ知り合った彼にアタックしてるんだけど、なかなか手強いわ~」

「ねえ、どつかにいい男いない？ もしいたらあたしに紹介してよ」
「これらは彼らの日常会話。感情と欲望とが、すべて行動となつて現れている。

素直なことはいいことだ。ゲイ連の実行力は、まこと称賛に値する。それはあくまで『こちらに降り掛かつてさえ来なければ』の話だが……。

冷蔵庫には特別なシャンパン。もしそれが好みじやなかつた場合に備えて、外国のビールを数種類。さらに、それも好みじやなかつた場合に備えて、国産のビールもたんまり。あとは手作りのカナッペにグリルドチキン。食後にはローファット“じゃない”アイスクリームを用意した。

数日前からそわそわしつばなしのおれの様子を見て、「まるでローマ法王でもお迎えするみたい」とポールは笑っていた。

むしろローマ法王だったら、さほど氣忙しいことにはならないだろ? 聖者はとても寛容で、おれの生活態度など、おそらく少しもお気になさらない。もし法王が「ギネスは嫌いだ。カナッペは不味い」と言つたところで、おれはその言葉を個人的にとることはしないし、それによって下された評価がたとえ“D-”だとしても、おれの人生にはさほど関係のないことだ。（“死後の裁き”について

は、ここでは考えないことにする)。

だがしかし。今日ここに迎えた男から、「ギネスは嫌いだ。カナッペは不味い」と言われてもしたら、おれはたぶんガッカリする。生活態度をチェックされたあげく、「D-」と評されたら……きっと自分自身を根底から否定されたような気持ちになることだろう。特別なシャンパンは彼のため。おれがいくぶん緊張をもって迎え入れるは、「天の父」ではなく、「人の父」だ。唯一にして無二の存在は、ホワイトステッヂのダンガリーシャツと、古びたりーバイスをはいていて、長めの黒髪とブルーグレーの瞳をもつている。彼は「すてきな部屋に住んでいるな」と、初めて訪れる我が家リビングを見回して言つた。それだけのことなのに、おれはずいぶん嬉しいと感じる。同じことをローマ法王から言われたら、それは社交辞令だと思うかもしれない。

「空港からずつと荷物を持たせて済まなかつたね。重たかったろ?」そう彼が言つので、おれは「大丈夫です」と答えた。実際、それはとても重かつたが。

頑丈そうな帆布のバッグを彼は開いた。中から出てきたのはビールのパックや瓶詰めの類い。

「食料品だね?」と、おれは彼の背後から覗き込んだ。

「ああ、これはきみたちへのお土産だ」

手渡されたのはジャーキーの袋。パッケージには、かわいいムースの絵が描いてある。

「ヘラジカのジャーキー?」

「嫌いじゃないといいけど」

「嫌いとか以前に食べたことないな」

「ビーフジャーキーより癖があるが、おれは好きだ」

「楽しみだな。後でビールのツマミに開けよう。こつちは何?」メタリックな真空パック。それはずつしりとした重さがある。

「それはスマーケサーモン」

「わお! スマーケサーモン! これはママが羨ましがるだろうな。

彼女、スマートサーモンのマリネが大好物なんだ

アラスカ土産に喜悦を上げるおれに「きみは母親のことを“ママ”と?」と、彼が訊く。

「ああ……ええ、そう。いい年をしてみつともないかな? でも今さら“おかあさん”ってのも何かヘンだし……。ねえ、エドセル、これは冷蔵庫に入れた方がいいのかな?」

謎の瓶詰めはヒンヤリしている。パッケージから推測するに、おそらくレストランか何かで詰められた手製の何かだ。彼はおれの質問には答えず、ただ黙つて、何か苦いものでも口に入れたような、複雑な表情を浮かべている。

「エドセル?」

この沈黙は何だろ? おれは何かヘンなことでも……あつ、そうか。

合点した瞬間、彼はこちらの表情を読み取り「いや」と、慌てたように手を振った。

「いや、別にいいんだ。当然だ。だっておれたちは、その……長いこと会ってなかつたんだから。無理もない」

早口でそう言い、不自然な笑顔を作るエドセル。おれと彼とが最後に会つたのは昨年の冬だが、“長いこと会つていなかつた”といふのは、この半年の間を指すものではない。

ここは何と返事をるべきかとおれが考へていると、彼は「どうか、ミリアムはスマートサーモンが好きだったのか」と、話題を変えた。

「もつと早くそれを知つてればよかつたよ。五ヶ月前、初めて彼女の家に行つたとき、おれはイヌイットの民芸品を土産に持つて行つたんだ。それは複雑に編み上げたショールで、織り上げるのに何ヶ月もかかる。ところがマイアミは温暖で、毛皮を編み込んだショールの出番はないんだな」

おれは思わずくすりと笑つた。するとエドセルもつられ、わずかに笑顔を見せた。

「そのとき、もうひとつ用意したのはトナカイの糞入りの石鹼だ。美容にいいと評判の商品だつたが、これまたきみのママはお気に召さなかつた。『トナカイの糞ですつて？ 相変わらず女心がわかつてないのね』。そう言われたよ」

「そういうことなら、先におれに訊いてくれればよかつたのに。ママの好きなものはヨーロッパのアンティーケルイ・ヴィトン。あとはスマートサーモンにキャビア、ロブスター…魚介類はみんな好きかな」

「ああ、そういうえばそうだつた。彼女はおれの作るエビのフリッタ一が大好きだつたつけ」

遠い目をしてそう言つエドセルは、やつぱりなかなかの男前だ。身体に余分な脂肪はついておらず、髪はしつかり残つていて艶もある。人間、外見がすべてだと言つつもりはないが、それでもこの結果におれは満足だ。自分の将来についての保証を得た思いがする。

『ところであなたの父親という人はハゲではないですかね？』と聞きたくなつてきたあたりで、「あ、もう来てたんだ」とポールが登場。

「思つたより早かつたね」彼はスーパーの紙袋をテーブルに置いた。「高速が空いてたから助かつたよ。きみはスーパー・マーケットに？」

「トイレの電球が急に切れたから、買いに行つてた」

「トイレの電球。初対面のワンシーンに相応しい単語だな」

おれはポールをエドセルに、エドセルをポールに紹介した。

「はじめてケリーさん。お会いできて嬉しいです」

「いらっしゃい。おれのことはエドセルと呼んでくれて構わないよふたりはにこやかに握手を交わした。

ポールは“エドセル”と呼んでいい。ではおれはどういうふうに呼べばいいだろ？ 今さら“父さん”つてのもヘンな感じだし、“親父”なんて呼ぶほどには親しくない。ましてや“パパ”なんてもつと奇妙だ。何たつて、おれは産まれてこのかた、これらの単語を人に向かつて発したことはないんだから。

「あ、そうだ」とポール。「さつきローマンから電話があつてね。今からこっちに顔を出すつて」

なんだそれは。事後承諾なのか。突然の凶報に顔を曇らせるおれに、ポールは「大丈夫」と言つて笑つた。「彼はちょっと荷物を届けにくるだけだから。すぐ帰るよ」

「だといいが……」

おれが不安げに希望的観測を述べたといひで、玄関のベルが鳴つた。インターフォンのボタンを押すや否や、飛び出す声はもろちん……“噂をすれば影”だ。

『今日はゲストが来てるから、玄関先で悪いけど』と制止する間もなく、ずかずか上がり込むローマン。ここが他人の家であることを、たまに思い出してもらいたい。

「もー！ 今日お休みしてたなんて言つてなかつたじやない！ あたし、お店の方に行つちやつたわよ！」

プリプリ怒るローマンに、ポールは「ごめん」と謝罪した。「今日はアリシアと勤務日を交代したんだ」

「ほらこれっ！」所望の海草のパックと死海の泥石鹼！ 業務用サイズが五個ずつ！ すっごく重たかったわよ！ ここまで持つてくるの大変だつたんだから！」

「ちょっと……もう少し声のトーンを落としてくれないか？」

「あら、『ディーン。あんたもいたのね。だつたら迎えにきてもらやよかつた。見てよこれ、手が真つ赤！ 後でクリーム塗らなくちや』

「お友達？」

「客が来てるんだ。もつと静かな声でしゃべつてくれ

「あら、失礼。お客様？ 珍しいわね？ どなた？」言つてリビングを覗き込もうとするローマン。物見高い彼が首を伸ばすと同時に、おれの背後から声がした。

『いや、別に。化粧品のセールスマンだよ』やつひつてみたい衝動に駆られたが、いくらなんでも通らないだろう。

「そう……ええと、紹介するよ。友達のローマン。ローマン、彼はおれの父親でエドセル・ケリー。前に話したよな？」

するとローマンは、おれにではなく、エドセルに向かって「ええ、お噂は」と、微笑んだ。「とても素敵なお父様だと伺いましたわ」いきなり言葉遣いが丁寧になつた。さつきまでゼンマイ仕掛けのオモチャみたいにキーキーわめいていたくせ、この変わり身の早さときたら、まったく尊敬に値する。外面の良さは、そんじょそこいらの政治家も顔負けだ。

「ケリーさんは、イヌイットの民俗学に精通していらっしゃるのでしょう?」「と、ローマン。

「精通とこいつほどではないけどね……おれのことはエドセルと呼んでくれて構わないよ。どうも敬称には慣れていないもので」

だとしたらきっと“父さん”って呼ばれるのにも慣れてないだろうね。さて、それでおれはあなたのこと有何て呼べばいい?

「よろしければ」と、改まって言うローマン。「イヌイットの文化について、一、二、三質問させて頂いてもいいから?」こんな機会めつたにあるものではないから……。もし差し支えなければ

にっこり微笑む彼に、おれは素早く言い放つ。

「いや、差し支えるよ。エドセルはさつき着いたばかりなんだ。とても疲れてる。だからきみの質問はまた今度」

「デイーン、おれなら平氣だよ」声に笑いをにじませるエドセル。

「老人じゃないんだ。そんなに心配してくれなくていい

「別にあなたを老人扱いしたわけでは……」

そうじゃなくて、このお騒がせ男に消えてほしいがゆえの便なんだつてば! しかしそんなことがエドセルに伝わるわけもなく、彼は二コ一コと「で、何が聞きたいんだい?」と、ローマンに話しかけている。リビングに消える一人の背を見送り、ため息をつくおれの肩に手を置いたのは、もちろんポールだ。

「ごめん。ぼくがローマンを断るべきだったね。せっかく親子水入らずだったのに」

申し訳なさそうに言つ彼の手をおれはとつ、「別に“水入りゅ”とかはどりでもいいんだ」と否定する。

「やう?」とポール。

「ああ、おれが心配してるのは、ローマンが妙な発言をしやしないかつてことだ。つまり、アラスカの素朴な中年男にとつてショックな話題を」

「それは心配いらぬと思つた。ローマンはあれで常識があるんだ」「あれが常識人だったら、パートナー・ラブはファースト・レディになれる」

おれの主張にポールは笑い、それから“やれやれ”といつ風に笑つて首を横に振つた。

「ディーンつてば。いつたいどりしたの? お父さんが来てるつてそんなに緊張する」と?」

「緊張はしてないさ」

「じゃあ何?」

「それは……」言ひかけたところで、ローマンが顔を出す。
「ねえ、ちょっと。あなた方、ゲストにお茶も振る舞わないの?
いえ、“ゲスト”つて、わたしのことじゃなくて」

「ああ、ごめん。今行く」

「この間、わたしがあげたハーブティはまだある?」

「あるよ」

「あなたのお父様にそれを出してあげたいと思つんだが」

「ああ、いいよ。……ところで初耳だな。きみがイヌイットの文化に興味があるとは知らなかつた」

「あたしは色々なことに興味があるのよ」

ローマンはきゅつと肩をすぼめて見せた。そしてとびつきのスマイルをひとつ。なんだか嫌な予感がする。

結局のところ、ハーブティは一杯だけ。おれたちはすぐにビールの栓を抜いて、ジャー・キーをかじりながら、とりとめもなく様々なことを喋り合つた。

案じていたローマンの奇言は少しも見られず、それどころか彼は良い料理人となつて、おれの父親をもてなしてくれた。“まさかこのまま朝まで居るんじゃないだろうな？”といつこちらの気持ちを察したか、迷惑にならない程度の時間に引き上げるという配慮も忘れない。なんだ、彼はやればできるんじゃないか。いつもこれぐらいいのセンスでもつて生きてくれれば、おれだって無下に追い返そとはしないのに。

翌日、掃除機をかけていると、「昨日はおじやまさまー」と、ローマンがやつてきた。

「無理に居座つたりして、『めんなさいね。でもおかげでとつても楽しかつたわ。これ、お礼によかつたら』言つて、小さな紙袋を差し出す。

「なに？」

「焼きたてのマフィンよ。チエダーチーズ味。お父様がお好きかと思つて」

「Hドセルはどうかしらないけど、おれは大好きだ。嬉しいな、ありがとう」

「お父様は今日はいらっしゃらないの？」

「姉のところに行つたよ。孫と会うのは初めてだから」

包みを開くと、チーズのいい香りが広がつた。これでコーヒーを淹れない手はない。

キッチンでコーヒー・フィルターの準備をしていると、ローマンが背後からツツツとにじり寄つて來た。

「何か手伝つことある？」

「いや、大丈夫。座つてろよ」

「ねえ、ディーン……あたし、あなたに言つておきたいことがある

の

「きみの使つてゐる美容液には興味ないよ」答えながら、コーヒー豆をスプーンで計る。

「あなたのお父様、とてもすてきね」

「ありがと」深煎りだから、少なめでいいか。

「あたし彼に一眼惚れしちやつた！……つて、やだちよつとー。豆こぼれてるわよ！」

キッチンの床に散らばるコーヒー豆は、おれの心象風景に同じ。衝撃により拡散し、まとまりがない状態を示している。

「一眼惚れ……」

「そう」嬉しそうに微笑むローマン。

「嫌な冗談言うな」

「冗談じゃないわ。昨日あたしは恋に落ちたの」

「沼にでも落ちてろ」

「ひどい！ なによ、その言いぐわはー！」

ホウキで床を掃きつつ、おれは「正気に戻れよ」と、アドバイス。

「一眼惚れ？ 何だそれ？ そんな馬鹿な話があるか」

「何が馬鹿？」

「いくらエドセルがおれに似て男前だからって……別に普通のおつさんだぜ？ 格好はあの通りだし、きみの好むブランド服を着てるわけでもない」

「だからアンタは浅はかだつてのよ。恋は衣服するもんじゃない。ハートですよ」

「普段、人の服のラベルばかりチェックしてる奴がなに言つてるんだ。そもそもきみの好みつて言つたら、ダンサーとか俳優とか、そういう手合いだろ？ アラスカのみやげもの屋の主人までターゲットに入つてるのは思わなかつたけど」

「ダンサーとか俳優とかなら掃いて捨てるほどいるもの。でもあんな人、このマンハッタンで見たことあつて？」

「ブロードウェイ通りにはよくいるよな。外国からの観光客だ」

おれとローマンの意見は、いつも基本的に一致しない。それはわ

かつていたが、まさかここまでわけのわからぬことを言い出すとは。『あなたの父親に一悶惚れ』と告白されたところで、『ああ、それはいいね』なんて言えるわけがない。そんな簡単なことが、どうして彼にはわからないのだろう。

「マジな話、おれの親父はよしとけ。どう考へてもゲイじゃないし、それに一応まだ、お袋と結婚してゐる。エドセルがきみの恋人になる可能性は、百万分のいちにも満たないよ」

「その百万分のいちを掴むのが、ワ・タ・シ」

「無理だね。今回だけは」

「うふふ、まあ見てうりうりしゃい。きっとびっくりする結果になるわよ

「ならない」

「“ママ”って呼んでもいいのよ

「呼ぶか！ 気色悪いこと言つなー！」

ポールはソファにかけているが、身体を前に二つに折りして、ゲラガラ声を上げて笑つてゐる。これ以上屈んだら、きっと彼の頭は床にめり込んでしまうことだらう。

「すごいことになつて……なんでまた……そんなこと……」

笑い上戸のポールは呼吸困難になつてゐる。そりやあ、面白い話だらう。おれだつてこれが自分事じゃなかつたら、涙目になつて爆笑しているに違ひない。

「それで……エドセルは何て？」

「彼はまだ何も知らないよ。自分がゲイのお兄ちゃんに狙われてると知つたら、今この瞬間、呑氣にシャワーなんて浴びてられないと思うね」

「二人の孫がとても可愛いくと言つて、『機嫌で帰宅したエドセル。

そんな素敵な一日を台無しにするような話は、おれにはとてもでき

ない。まあしかし、彼の滞在期間は五日程度だ。とりあえずは真実を知らぬままでいてもらつて、あとは良きに計らえだ。

おれがそう言つと、ポールは「そんなこいつまくいくかな？」と、不安になるようなことを口走る。

「なんだそれは、どうしてそんなことを言つんだ？」

「だって考へてもみてよ。あのローマンだよ？ 五日程度つてきみは言つけど、五日もあれば彼は……」と、そのまま言葉をフロードアウトさせる。

「なんだ？ “五日もあれば彼は”……何だつてんだ？」

「とにかく、ローマンの実力を甘くみない方がいいって」と「ぞぞつ。背中にただならぬ冷氣が走つた。この部屋に、ゴーストがいるのかも。

「それで？」と、おれ。

「それだけ」ポールはさつと立ち上がり、「牛乳、まだあつたかな？」と言つてキッチンへと向かつた。

おいおい、牛乳なんてどうでもいいだる。なにかもつと差し迫つた会話をしてたんじやなかつたのか、おれたちは。

首にタオルをかけた格好で、エドセルが現れた。

「こここの家の風呂はすごいな。サウナやらジエット噴射やら、ボタンがいっぱいあって」

こちらもまた香氣なコメント。濡れた髪のまま携帯をいじり、「

おつと、メールが来てる」と確認する。

「ローマンからだ」ぽつり、と言つエドセル。香氣なコメントは一転、緊張の内容へと変貌する。

「なに？ 彼にアドレスを教えたわけ？」

おれがそう聞くと、エドセルは「“メアド交換”つてやつだよ」と、不似合いな単語を口にした。

「明日は彼とミコージカルを観に行く約束を……」

「なんだつて！？」

「ローマンとミコージカルを観に行く約束をしたんだ」

その時ポールがキッキンから顔を出した。

「大きな声……どうしたの？」

おれはすぐるような目で彼を見た。そして悲痛に一言。

「エドセルがローマンとミュージカルを観に行くそうだ……」

ポールは「ああ」と納得したような顔をして、キッキンにいつたん引っ込み、それからビールの缶を三本持つて来た。そうだよな。バッドニュースにはホットミルクでなく、やつぱり酒だ。

「何を観に行くんですか？」と質問するポールに、おれは答える。

「レントじゃないのか？ それとも ヘアスプレー」

「ライオンキング だよ」と、エドセル。

「エルトン・ジョンつながりか」

「つながり？」エドセルは小首をかしげた。

「いや、何でも……。ところでなんでまたローマンとミュージカルを？」

「マンハッタンではみんなミュージカルを観て帰るんだろう？」

「それはローマンが？」

「いや、きみのママが。『何でもいいから何か観て帰りなさい』とね」

「だったら、別にローマンとでなくともいいと思つけど……」

「彼がチケットを手配できると言つてくれたんだ。なんだかコネがあるんだって？」

「ローマンはいろんなところに顔が広いよ。特に“ゲイ”関連のツテがね」

「そうか」エドセルは頷き、ビールを開けた。

自分の父親がホモフォビア（同性愛嫌悪症）でないことは喜ぶべきことだ。しかしローマンと“ゲイ”する方がいかに危険かくらいは、まず理解してもらいたい。

「こちらもまたビールを開け、「ミュージカルならおれと一緒にいけばいいのに」と、不服を述べる。

「そうしたいが」とエドセル。「ローマンの手配は僕の部なんだ。

さみは田中は仕事だろ?」

「まあ、そうだけど……」

「夜は一緒にディナーをとり。仕事は何時に終わるんだ?」

「明日は会議があるからわからなによ。たぶん九時過ると遅い」

「待つてるよ」

「十時に近い九時だ」

「別にいいや」

「そんなに遅くまで待つてももうなんて悪いよ」

「悪いことなんてない」Hドセルはこいつと微笑んだ。「さみを待つてるよ」

気がつくと、ポールが優しい表情でおれたちのことを眺めている。これはあれだ『微笑ましい光景だな』って思つてゐる顔だ。

おれはぶつきらぼうにHドセルに言つた。「そんな遅くまで待つてもううなんて心苦しいよ。いつも気になつて会議に集中できな

い」

すると、彼はちょっと寂しそうな表情で「さうか」と言つた。その顔、なんだかあまり見たたくない種類のものだ。おれはポールにビルを渡し、「風呂を使うよ」とバスルームに入る。

バスタブにお湯を溜めていると、ポールが来た。

「どうしたの? ティーン。さつきのは」

「さつきの?」

「Hドセルにあんな感じの悪い言い方をして」

「感じ悪いか?」

「自覚がなかつたの? わざとかと思つたけど」

「どうもおれは彼とうまくやつにくいな……」言つて、バスタブの縁にかける。「でも無理もないよな? なんたつて父親と過ごすのは産まれて初めてなんだし。いつもどういふ会話していいかわからないんだから」

「そうだね」ポールはおれの髪に手をあてた。それを撫でるようにながら、「でも」と言つた。「さつきのは“父親とうまくやつべてたじやつべ”

い”つて言つたか、単に意地悪な感じがしたな。どうしてあんな言い方を?』

「どうしてかな……」ポールの手からビールを取り、それに口をつける。しばし考え、「たぶん腹が立つたから」と言つた。

「何に?』

「Hドセルが自ら危険に飛び込むような真似をするからな。」いつちはローマンを何とか遠ざけようとしているのに、おれの配慮をまるつきり無視するようなことをして

「それだけ?』

「それだけって何がだ?』

「ん、きみがそう思つなら別にいいけど……」

なんだか含みのある言ひ方だ。このまま議論を続けたら喧嘩に発展するかもしね。今おれはイラついてる。でも無理もないよな? なんたつて父親と過ごすのは産まれて初めてのことなんだ。

次期ローマ法王でも決めようかといつほどの長い会議が終わり、オフィスを出たのは予想通り、十時に近い九時だった。携帯を見ると、Hドセルからメールが届いている。

やあ、ハードワーカー! 会議は順調? よかつたらティ

イナーと一緒にどう? 仕事が終わつたら連絡を貰える?

なんだそれ。おれは昨日の時点で断つたつもりだったのに。『よかつたらティナーと一緒に』つて、こんな時間まで待つてもらつた状態で断れるわけないじゃないか。

彼に電話をすると、今はコーヒーショップにいるところ。おれはその周辺のレストランで、予約がいらないところをいくつか思い描き、タクシーを捕まえた。運転手に行き先を告げ（それはほんの目と鼻の先だが）考える。Hドセルはおれを待つてたんだ。メシも食わずに、息子の仕事が終わるのを。なんだろうこれは、こういうこ

とをするのが“父親”ってやつなんだろ？か。おれにはそれが長いことになかったので、よくわからない。そもそもエドセルだって、

“父親としての正しい行い”なんて、わかつてはいないうだろ？

もしこれが普通の親子関係だったら、こうこうの場合はどうする？

『なんだよ親父！ おれは昨日、“待つてくれなくていい”って言つたじゃないか！ 人の話を聞いてないのか？！』

……いや、これはないか。たとえおれとエドセルが普通の親子関係を持つていたとしても、おれは親に対してもこんな口の利き方はしないはずだ。

あれこれ考える間もなく、タクシーはコーヒーショップに到着。エドセルは店の外で、おれのことを見つけていた。

「やあ、ディーン、急がせたかな？ 無理に呼び出したりして済まない」

「いえ、いいんです。ところでエドセル、タイ料理は好き？ この近くにいい店があるんだけど……」

ナイスな笑顔とナイスな会話。おれたちのやり取りは、やっぱりどこかぎこちなく、別れていた年月の長さを感じさせる。

ちなみにエドセルはタイ料理が苦手だった。辛い食べ物とパクチーが駄目なんだそうだ。そんなことおれは知る由もない。別れていた年月の長さは伊達じゃないと感じさせてくれるエピソードだ。

タイ料理屋のあてが外れた後は、ちょっと散々な日にあつた。いつもだつたら予約せずとも入れるはずのフレンチの店は、その日に限つて満員御礼。次に選んだ地中海料理は定休日だ。歩き回つた末に「もうここでいいか」と、辿り着いたのは、インドネシアのレストラン。おれも初めて入るその店は、味は悪くなかったものの、サービスがいまひとつ。割れたスピーカーからはガムランが大音量で流れついて、普通に会話することもままならない。明らかにおれの

選択ミスだが、Hドセルは「そんなに悪くもないよ」と慰めてくれた。それでも、ずいぶん手際の悪い奴だという印象を与えただろうことは否めない。いつもだつたらもつとスマートに“デート”できるんだが、今日に限ってセンスが鈍つたようだ。

「よりによつて今夜だ。まるでおれに意地悪するかのよつて、どの店にも入れなかつたんだ。こんなことつてあるのか？ Hドセルには悪いことしたよ」

帰宅し、ポールに“失敗”を訴えると、彼は「楽しくなかつたの？」と聞いてきた。

「楽しいとかそれ以前の問題だな。音楽があんまりうるさいもんで、おれたちはいちいち“えつ？何だつて？”とか言つてや……まあ、それがなかつたとしても、会話が弾んだかどうかは怪しいけど」

ポールはおれの椅子に逆向きにかけ、「今夜はずいぶん疲れたみたいだね」と言つた。こつちはスーツのまま、ベッドにだらしなく横たわつていて、それは“ずいぶん疲れたみたい”な格好に相違ない。

「疲れたよ。長い会議の後だしな。おれとHドセルは、まだお互いリラックスした関係性じゃないんだから。さつきの“デート”がいい例だ。おれたち、いつキスをしたらいいかと様子を伺つ、付き合い始めてのティーンエイジャーみたいにぎくしゃくして……いや、これがあんまりいい例えじゃなかつたか」

ポールは少し笑い、椅子からベッドへと移動。屈み込んでおれにキスをした。一瞬触れるだけの軽いキスだが、それだけでおれの気分はずいぶん楽になる。

「きみたちがぎくしゃくしてたつて？」と思案げな顔をし、ポールはつぶやいた。「それはどうだろ？……そうなのかな？」

「どういう意味だ？」

「うん、きみは昨日『父親といまくやりにいく』つて言つたけど、ぼくにはそつは見えなかつたんだよ。むしろ、“きみたち、本当に親子なんだな”つて思つたくらい。ぼくに父親はいないけど、ああ

「いややり取りつて、父子ならではだろ?」

「ああいう”ついて?」

「父親にする息子の図」

「すねてなんかいるもんか!」

「ほら、大きな声」戒め、おれの鼻先にチヨンと指を置く。「ね、もしよかつたらこないだの続きを聞かせてよ

「こないだの続きを?」

「ぼくは訊いたよね? “お父さんが来てるってそんなに緊張すること?” そしたらきみは“緊張はしない”つて

「ああ」

「緊張じゃないとしたら、それって何なの?」

なんて難しい質問をするんだ? これにうまく答えられたら賞品でも? おれがそう聞くと、ポールは「賞品はきみが“本当の自分に気づける”つてことさ」と笑つて言つた。

「そうか、よしわかつた。ええと……何だらうな……」天井を見つめ、おれは考えを巡らせる。「何だらう……自分でもよく……」「わからぬい?」

「ああ」

「じゃあ今は無理に頭で考えよつとしないで。でもぼくの質問を心に留めておいてくれると嬉しいな」

「そうするよ」

現時点では答えられない。だから賞品もおあずけだ。本当の自分に気づけること。その賞品の価値は、簡単に言えば“幸福への切符”。

たとえば、おれは“ポールのことを愛している”という自分の本心に気がついた。その気づきはおれに幸福をもたらし、今に至る。仮に真実がネガティブなものだとしても、最終的には幸福になれるだろう。自分が苦手とするものを知ることは、何が好きかを知ることと同じくらい重要なことだからだ。

おれは今回の件で、どんな真実を手に入れるだらう。ハドセルと

いて、おれはいつたい何を感じてる？ もしそれがネガティブなことだったら……。それでもおれは（“おれたち”は）幸福になれるんだろうか？

翌日、おれが仕事から帰宅すると、エドセルがソファで電話をしていた。親しげな会話の様子から、てっきりお袋としゃべっているのかと思ったが、彼の口から「この間のライオンキングは……」と言ふ台詞が飛びだしたので、電話の相手がミリアム・ケリーでないことを、おれは悟った。

「ずいぶん長電話だつたね？」と聞くと、エドセルは「本当はめつたに電話で人と話さないんだ」と肩をすくめた。「でもローマンは会話がうまいから、つられておしゃべりになつてしまつたよ。なんだろう、彼には不思議な魅力があるね？」

「“魅力”というか“魔力”がね。気をつけて。あいつに魅入られたが最後、ミュージカルとマドンナと日焼けサロンが好きになつてくるから」

「だつたら今のところ魅入られた兆候はないな」そう言つて笑うエドセル。

兆候があつてたまるもんか。ミュージカルとマドンナと日焼けサロンが好きな親父だなんて冗談じやない。別に差別するつもりはないが、父親がゲイになつて嬉しい息子なんて、どこの世界に存在する？ それにもし万がいち、エドセルがゲイになつたりしたら、お袋が気の毒だ。やつと見つけた夫がホモになつての帰還だなんて。あまりにも悲劇すぎて、いっそコメディみたいじやないか。

「ミュージカルを観たこと、お袋には？」

「いや、まだだ」

「彼女に電話を？」

「そうだね……」携帯を見つめ、考え込むような顔をするエドセル。

「どうしたの？ まさかママと向か……」

「いや、別に何もなによ」「エドセルはまほつと顔を上げた。「何もない。きみが心配しているようなことは何も」

「おれが心配しているようなことは？」

「あ、いや……」墓穴を掘ったと気づいた彼は、諦めたようにため息をつき、「決めつけたように言つていいめん」と謝った。

「ミコアムとはうまくいってこるよ。ただ……」もう一度、ため息をひとつ。「やつぱりね、長っここと彼女と会つていなかつたものだから、それなりに“ブランク”というものを感じているんだよ。どうもおれは彼女の機嫌をそこねてしまつようなどばかりするらしくつて。ミコアムはおれとこるとイライラし通しだ。『女心がわかつてな』とい、じょつちゅう言われるし……正直、どう振る舞つていいのや」

困った様子のエドセルのとなりにかけ、「女心を理解するのは難しいよ」と、おれは言つた。「だっておれたちは女じゃないんだし。それにうちのママは特に難しい性格をしてるからなあ」「そこがミコアムのかわいいことこいだ」

「まじ、じゃあ、そういうことを言つてやれば？ 『きみのやつこうところがかわいい』」「そんなこと言つたら殴りられるだらうな」「ああ、確かに」

おれたちは軽く笑いあい、そして沈黙が訪れた。

ああほり、またこれだ。“正直、どう振る舞つていいのや”ってのは、きっとおれにも該当する話なんだろう。エドセルがローマンと長電話でるのは、彼らが初対面という間柄だからだろうか？“ブランク”のあるママやおれよりも、“ノーブランク”な相手の方が、一緒にいて気が楽ということもあるのかもしれない。

「やっぱミコアムに電話をするよ」と、エドセル。「『きみのそうこつところがかわいい』とは言えないけど、それに類する言葉をかけてみようかと思つ」

「それはいいね。幸運を祈ります」おれは立ち上がり、彼に指をクロスさせて見せた。

「彼女に泣かされたら慰めてくれよ」

「ええ、もちろん。一緒に泣きましょう」

エドセルが妻に電話をしている間、おれは自分の部屋から、ローマンに電話をかけた。

「あらー、ディーン。あなたから電話なんてお珍しい。さつきね、あたしエドセルとおしゃべりしていたの」

「ああ、知ってるよ。見てたから。なあ、おれは完全にきみに油断してたぜ。何が『イヌイットの文化について、一、三質問』だ。あの会話のどの瞬間に連絡先を聞いたのやら。ローマン・ディスティニーは個人情報を引き出す天才だな」

「まあ、お褒めに預かって、どうも」

「褒めてない。いつもに増して褒めてないぞ」

「あら、それはどうも」

「どうしてエドセルなんだ？ いいかげん他の奴をあたってくれよ。きみならよりどりみどりだろ？ おれの親父にちよつかいを出すのは頼むからやめてくれ」

「人の恋路をジャマするつての？ いくら息子でも、お父さんの幸せを阻む権利はないはずよ」

「お父さんが不幸になるのを黙つて見ているほど、薄情な息子じゃない」

「心配しないで。あたしがエドセルを幸せにして、あ・げ・る」

「きみの幸福は彼の不幸だ」

「なんでそんな風に決めつけるのよ？ エドセルはねえ、あたしといふとき、とーっても幸せそうなんだからー。ケラケラよく笑つてるし、時間の過ぎるのなんかアツといつ間。『きみは本当に素敵だね』って言つてくれたのよ」

「それぐらい……言うだろ。社交辞令として」

「ああいう人は社交辞令なんて言わないわよ。彼つたら本当に素直

でキューーートだわ~」

ケラケラよく笑ってる? 時間の過ぎるサマツという間? なんだそれは、いつたい誰のことを言つてるんだ? 少なくともおれの知つてゐる誰かのことだと信じ難い内容だ。

電話を切ると、待つていたかのようなタイミングでポールがやつてきた。おれはポールを椅子に座らせ、「この間の続きだ」と宣言する。

「“おれがエドセルのことをどう思つてるか”覚えてるか?」「もちろん」とポール。

「よし」うなずき、おれは話し始める。「エドセルはとてもいい人だ。だけど、おれの中には戸惑いもある。それは彼と/or個ではなく、『父親』というものに対してなんだ。たとえば、おれの父親がエドセルでなくとも、おれは困惑して、同じような態度をとつたと思つ。なぜつて、おそらくおれは父親から良く思われたいんだ。『まるでローマ法王でもお迎えするみたい』ときみは言つたよな? おれにとつて父親との対面はそれ以上のものだ。彼に否定されることは、自分のアイデンティティを否定されるも同じことだからさ。」
以上

「それがきみの答え?」

「そうだ」

「そうか……」ポールは軽く頭を伏せた。

「何だ? 何か不服か?」

「不服つていうか……何か“頭で考えました”みたいに聞こえたから

それはそうだ。おれはこのとひ、ずっとと考え続けてた。おれとエドセルのことを、さまざまな角度から見つめてみようと努力したんだ。

ため息をつき、おれは言つた。「明確な答えかと思つたんだけどな

「うーん、そうだね。確かにかなり分かりやすい。分析結果として

は悪くないと思つけど」

「『分析はクライアントの仕事じゃない』って言つたんだな？」

「まあね」

「おれもビックではわかつてたよ。嘘くわい答えたと」

「さすがティーン、曖昧に逃げないのはきみのいいところだね」
すいぶんわかりやすく褒められた。ポールはカウンセラーとして
も、いいセンスを持つているのかも知れない。とにかく、『賞品』は
まだオアズケだ。

「なあ、おれもきみから聞きたい話の続きをあるんだ」「
なに？」

「ローマンの」とや。『五田もあれば彼は』……そう言つたきり、
きみは黙つたる。おれはその続きを気になつてゐる。五田もあれば
ローマンはどうだつて？』

「ああ、それが」彼は思い出したよつてクスッと笑い、「昔の話だ
けど」と切り出した。

「ずっと前、ローマンはある男の人を好きになつたんだ。彼の名前
は……仮にXとしておくよ。なぜってその人は有名な俳優だから」
「おれでも名前を知つてる？」

「もちろん」

「オーケー、続けてくれ」

「あるときローマンはこう言つた。『あたし、彼に一目惚れしちゃ
つた！』周りにいた友達はみんな笑つたよ。『だからどうしたつて
の？ あたしもよ』『一目惚れですって？ 馬鹿ね！ 彼はセレブ
なだけじゃなく、既婚者のストレートよー』……でもローマンは少
しもひるまなかつた」ポールの目がきらりと光る。おれは無意識に
拳を握りしめていた。『Xと出合つてから数時間後、ローマンは樂
しそうに彼と談話していた。その翌日、彼らは一緒にミュージカル
を観に行つた。そのまた翌日は長電話をしていて、その翌日はショ
ッピングに出かけてた。さらに翌日には花を贈つていて、その夜に
は……ベッドインしてたんだ』

「ここで思わず悲鳴を上げると、ポールはおれの手にそっと手を重ね「大丈夫、落ち着いて」と優しく言った。

「ふたりは結局、長続きしなかったんだけど、でも×は奥さんと離婚したんだ。ローマンが直接の原因かどうかは知らないけどね。でも無関係ではないと思う。これは四年くらい前の話だよ」

脳裏に『四年くらい前に離婚した有名な俳優』のリストが展開されそうになつたが、頭を振つてそれを追い出す。おれは映画が好きなんだ。こんな下らないゴシップで、素晴らしい愉しみを奪われてたまるか。

「そうか、わかつたよ。つまりローマンには五日もあれば……」

「充分すぎる時間だ」ポールはこくんと頷いた。

おそろしい話だ。キャンプ場で聞いたら眠れなくなるよ! つな、第一級のホラーだ。

「『田をつけられたのが自分でなくてよかつた』って思つてゐるじよ」とポール。

「ああ、そりやあな。エルム街のフレンティに田をつけられた方がずいぶんマシだ」

「ローマンはかつて、きみのことも狙つていたんだよ」

「なにつ!?

「でもぼくがきみのことを好きだつて知つてたから、具体的なアプローチには出なかつたんだ」

「そりやあ、きみはおれの命の恩人つてわけだな?」

「ある意味では。でもぼくが邪魔しなかつたら、きみは今頃ローマンと幸せに暮らしていたかも知れないよ?」

「ないな。それはない」

「どうかなあ」にやりとするポールの肩に腕を回し、自分の方へ引き寄せておれは言つ。

「ポール、『運命』つてものを甘く見るもんじやない。おれはきみと結ばれる結果にあつたし、それ以外の可能性なんて、これっぽつちも存在しないんだ。悪魔 すなわちローマンがどんな手をぬく

したつて無駄や。おれたちはこつなる運命だつたんだから「
すると、ポールはおれの顔を見つめ、「わあ……」と感嘆したよ
うな声を上げた。

「なんだ?」

「す、じい。なんだか改めて口説かれた感じ。びつじよつ、何かドキ
ドキしてきた……」

頬を染める彼の様子は、“愛らしく”の一言だ。こんな感情をロ
ーマンに感じることは、百パーセントあり得ない。

「ポール、おれたちの運は悪魔にも打ち勝つ……おみのドキドキを
聞かせてくれ……」

甘くわざわざしきつ、彼のシャツの裾から手を入れる。ポールは小
さく震え、うつとりと目を閉じてベッドに倒れた。おれとポールは
結ばれる運命。それは今夜、この瞬間にも。ところどころでXつて
マジで誰なんだろう……。

後になつてよくよく思い返してみると、ポールの言葉にのみ恐ろし
い予言が含まれてやしなかつただろうか。彼の語ったところによる
と、ローマンの行動は以下の通り。

- 1日目 : 楽しそうに談話する。
 - 2日目 : 一緒にゴージカルを観に行く。
 - 3日目 : 長電話。
 - 4日目 : ショーシピングに出かける。
 - 5日目 : 花を贈る。
 - 5日目の夜 : ベジでにインする。
- なんとスピードイカつ、無駄のない計画。ヘルム街のフレディも、
いつもひとつひとつ、目的を成就していったのだろう。ローマ
ンとHドセルが出会つてから今日で四日目。この日はポールが朝か
らHドセルを連れ出してくれたくれたおかげで、とりあえず魔の手

を遠ざけることができた。しかしローマンの計画は現段階、“長電話”まで順調に進んでいるらしい。

ポールに髪と髭を手入れしてもらつたエドセルは、手前味噌かもしれないが、ますますもつて男前に磨きがかかつてゐる。こんな状態の彼をローマンの前に出すのは、世界残酷物語に等しい展開だ。

キッチンでサラミを切つているエドセルに、おれはそつと近寄り、「ちょっと嫌な話をしてもいいかな?」と、シリアスな顔で話しかけた。

「嫌な話 それは嫌だな。でもいいよ。何だい?」彼はナイフをまな板の上に置いた。

「ぼくからの忠告です。ローマンとはもう会わないほうがいいと思います」

「それはどうして?」

「彼はゲイなんです」

「ああ、そうだつてね」

「あなたを狙つてます」

途端、彼は爆笑した。声を上げて笑い、「おれのことを彼が?まさかそれはないだろ?」と、頭を振る。

「嫌な話だけど、本当ですよ」

「こんな田舎の年寄りを狙おうだなんて……そんなことはあり得ないよ」

「あり得るんです、これが」

「ローマンはスタイリッシュな子だし、もっと若くて格好いい男の子と付き合いたいんじゃないのかな」

「若くて格好いい男の子は食い飽きたんですよ!…!」

おれがそう怒鳴ると、エドセルは腕組みし、シンクに寄りかかった。

「じゃあ、もし万がいち、彼があれを狙つているとして、だ。おれがどう危険だつて言つんだ?」

「それは……」

「街中で押し倒されるでもないしな。おれたち、ふたりでモーテルにでもシケこまない限り、互いの真操は守られるよ」

「冗談めかして言つエドセル。おれの忠告を少しも真剣に捉えてないみたいだ。」

「まあ……あなたがそれでいいって言つなら、ぼくも止めませんけどね」肩をすくめ、両手を広げる。「ローマンヒショッピング。いいでしょ、好きにしてください。わざと彼は最新のファッショントをあなたに紹介してくれますよ」

「ディーン、きみは何をイリつこっているんだ?」眉間にシワを寄せてエドセル。

「そんなこと、こちこち言わなきゃわからないのか? ゲイの友達と自分の父親がくつつきやくなつてて、イラつかない息子がどこにいる?」

「自分の胸に手を当ててみたらどうです?」

言われ、エドセルは真面目くそつた顔をして、胸に手を置いた。そして「何もわからないね」と、かぶりを振る。「おれの心はおれ自身の」としか語らない。きみのことはおれにはわからない。きみ自身が話してくれるまでは

なんという二づき。彼は“女心”どころか、“息子心”もわかつてない。だいたい『きみは本当に素敵だね』なんて、どんなシチュエーションで、どの面さげてローマンに言つたんだか。そりや、厭らじに意味なんてないつていうのは分かるよ。ただエドセルは純粋に……ローマンみたいな優しくて氣の利く“息子”が、かわいいと思つたんだらう。

エドセルはじつとおれを見つめ、「きみとおれどが初めて会つたとき」と、話し出す。「あのときもきみはそんな風だつた。今度こそはおれは聞きたい。じつしてきみがおれに怒つているのかを」「“じうじて”だつて?」彼の台詞におれはブチ切れた。「あたはぼくを捨てたんだ!」詰めより、さらじて続ける。「これ以上シンプルな怒りの原因が他にあるとでも?」

肩で息をするおれと対照的に、エドセルはとても静かな表情をしている。そして穏やかに、「いつそれを言われるだろうと考えていたよ……」と、つぶやいた。

「実のところ、その件についてきみと話す機会を待つてた。きみがいつ“本題”を切り出すかと」

エドセルがあまりにも落ち着いた様子なので、おれは自分が大声を出したことが恥ずかしくなった。彼はこれ待つていたというのか。でもどうしても、こんな喚き声からスタートすることはなかつたはず。力んで怒鳴つた後は、全身の力が抜けたようになつた。人を傷つけるのは、どんなときだって気分のいいものではない。

「今になつて、初めてきみの声を聞いた気がするな……」エドセルは微かに微笑んだが、それはどこか寂しそうでもあった。

「きみはおれを憎む権利がある。罰を与えることも」

おれはあんたを憎みたいんじゃない。ましてや罰するなんて考へてもみなかつた。

「きみがおれを嫌うのは無理もない話だ」

「ちょっと待てよ。おれがいつ、あんたのことを嫌いと言つた？」

「どうやつたらきみに償えるだろうと考へていたよ。この長い空白の時間を……おれはどうやつたら埋めることができるのかと……」

そんなこと、おれに聞かないでくれ。おれにだつてわからない。この長い長い、喪失の時間をどうやつて埋めればいいのかなんて……。

「ディーン、泣かないでくれ」エドセルは苦しげにそう言つた。「おれは息子に泣かれたら、どうしていいかわからない父親だ。きみが泣くと胸が締め付けられ……どうしたらいいのか……わからないんだ……」

エドセルはおれの頭を抱きしめ、まるで小さな子にするみたいに、頭のてっぺんにキスをした。こつちは父親に甘える少年つて年齢でもないし、事情を知らない奴が見たら、ゲイの痴話喧嘩みたいに見えるだろ？

エドセルに優しく揺さぶられ、おれは自然に言葉を見つけ出した。

「おれは……たぶん嫉妬してるんだ」

「嫉妬?」

「そう、あなたがローマンと楽しそうにしていることが面白くなかったんだ。それはアラスカでもそつだつた。おれはあの町の人々に焼きもちをやいた。おれが持つべきだつた父と子の時間。それをあの町の人は受け取つていた。それつてまるでビンゴの賞品を横取りされたみたいな気持ちでさ……」 そう言つて、おれはポールの言葉を思い出した。『賞品はきみが“本当の自分に気づける”つてこと』

。 そうだ、たぶんこれが本当の気持ちだ。それにしてもどうして真実は、いつも涙と共に訪れるんだらう。

おれは軽く笑い、鼻水をすすつた。『なんだらう、こんなこと言つてるなんて馬鹿みたいだな。もう子供じゃないつてのに……我ながら不気味だ』

「不気味なもんか」とエドセル。『それに子供じゃないつてことはない。きみはずっと子供なんだよ……おれのね』

エドセルは穏やかにそう言つた。その言い方。なんだか心が休まるようなリズムだ。これはDNAの成せる業なのか。いつの日か、おれが八十、九十になつたとしても、『彼の子供』であるという事実は変えようがない。そういう意味では、人は永遠に子供なのかもしない。

「明日はローマンと出かけるよ」とエドセル。『約束をしたからね。ミリアムへのプレゼントを彼に見繕つてもらうんだ。それで明後日はおれたちだけで出かけよう。どこかきみのおすすめスポットはあるかな?』

「そうだな……」「——アイランドはどう? おれはあそこが大好きなんだ」

「いいね、おれはまだ行ったことがない」

「それで夜はビリヤードのできるバーに行く

「ビリヤードか。きみは得意なの?」

「おや、うへ、あなたを泣かせるくらいには、

「ティーン、それは甘いな。アラスカの冬の娯楽は何だと思う？ 雪で家に綴じ込められっぱなしの間、おれがどれだけキューを握つてたと思うんだ？」

そう言つて、エドセルは不敵に微笑んだ。ビリヤードの腕を自慢するとき、きっとおれもこんな表情をしているんだろう。それはそういう魅力的で、ローマンが惚れるのも無理はないかな、という感じだつた。

都会のイケメンに飽きた奔放なゲイが、アラスカから来た渋い中年男に魅力を感じる。それがさほど奇妙なことではないと納得がいったとしよう。だからと云つてそれを黙つて見ていられるかといえば、それは別問題だ。

「ポール！ ポール！ 来てくれ！ 大変だ！」

出勤前の慌ただしい時間帯。エドセルはまだベッドの中での、おれは朝つぱらから気が動転している。

「どうしたの……？」髪にねぐせをつけたまま、ポールが部屋から出てきた。おれは玄関先にひざまずき、「花が……」とつぶやいた。「ローマンから花が届いた……」手にしてこるのはフラワー・ボックス。プレゼント用に包装されたそれは、愛する者の腕に抱かれようとして、香しい薫りを放つてこる。

「なんてことだ……」とポール。その表情からは絶望が感じられる。

「どうしよう、ポール。おれはどうしたらいい？」

「ティーン、落ち着いて」

「だって、その×とやらは、花が届いたその晩のついでローマンヒ

……」

義理堅いエドセルは、ローマンと出かける予定を崩そうとはしない。あと数時間もしたら、一人はショッピングに出かけてしまう。

ショッピング、花、そしてベッド。これがローマンのやり口だ。

「ああ……おれはいつたい、どうしたらいいんだ……」両手で顔を覆

うおれに、ポールは優しく言葉をかけた。

「しっかりして。何もかもが終わつたわけじゃない。まだ打つ手はあるはずだ」

「打つ手だって？ おれはもうローマンにもHドセルにも忠告をしたんだぞ！？ これ以上どうしたらいこい！？ Hドセルをクローゼットに閉じ込めるとかか！？」

ポールは厳しい表情で頷き、「何か手を考えよう」と固く言った。
“何か手を”だって？ 無理だ。おれがやれることはもう何もない。ローマンの危険さについては既に説いたが、Hドセルは『おれがどう危険だつて言うんだ？』と、まるで事態を理解していかない。これ以上、『危険だ、危険だ』と、彼に言い続けることは、まるで一人のことを信頼していないかのように聞こえるし（いや、少なくともローマンのことは信用していない。今までの実績から言つても）、人のいいHドセルはそこまでローマンのことを悪く思つていない。おれがローマンを誹謗すればするほど、こちらの心配は下がるばかりだ。

じゃあHドセルではなく、ローマンの方を説得するつてのはどうだ？

『頼むからやめてくれ』……つてのはもう言つたよな。

『ぼくのパパだぞ！ さわるな！ あつちいけ！』……つてのはいくら何度も頭がおかしい。小学生じゃないんだから。だいたい“説得”なら最初からしてるじゃないか。それなのにあいつは『人の恋路をジャマするつての？』と聞く耳も持たないんだ。

「Hドセルもローマンも、おれの言い分なんてどうだつていいんだ……」おれは諦めるように頭を垂れた。「もう彼らに言つべき」とは言つたんだ。それでも一人を止めることはできなかつた。もしかしたらローマンとHドセルはなるよつてになるのかもしね。おれときみどが惹かれ合つたように……

「ディーン……」

「おれは昨日、エドセルに『ローマンに嫉妬している』と言つてしまつたんだ。これから彼をクローゼットに閉じ込めたところで、それは“親切心”ではなく、“嫉妬心”だと解釈されるのがオチだ。おれが誤解されるのは構わないが、エドセルが状況を理解していいとなると……」

「しつかりして、ディーン。きみが自暴自棄になつてどうするんだ」おれの両肩を掴んで揺さぶるポール。まるで雪山で眠りに落ちる男を目覚めさせるかのようだ。

「ローマンはエドセルを幸せにすると言つたんだ……」なんだか頭が朦朧としてきた。これは何だろ。もしかしたら酸欠なのかもしない……。それにいくら息子でも、父親の幸せを阻む権利はないんだし……」

「権利だつて！？」ポールが突然大声を出したので、おれは雪山から瞬時に帰還した。

「ディーン、そんなことを言つながらぼくにも考えがあるよ」「か、考え？」

「いいかい、これは恋愛の話なんだ。“親切心”なんてお門違い。むしろ“嫉妬心”的方が正しいくらいだ」

「おれが彼らに嫉妬するのが正しいって？」驚いてそう言つと、ポールは「きみじゃないよ」と笑い出した。「すべてを正しい方向に戻そう。今すぐに」

彼は決然と言い放ち

そして行動を開始した。

そろそろ昼食の時間。おれはオフィス一階のロビーへ降り、ローマンとエドセルの姿を探した。彼らはまだ来ていない。『どのへんにいる？』とメールを打つと『もうすぐ到着……』と、ローマンから返信があった。

やつぱり会社を待ち合わせに指定したのはまずかっただろ？

時間的に仕方ないとと思ったが、他の場所にすればよかつたかもしない。そもそもこれでうまくいくんだろうか。

「遅れてごめんなさい！ 待たせたかしら？」

ロビーに響き渡る声。やたらよく通るそれは我が友ローマンのもの。

「済まない、おれが買い物に手間取ったんだ」とは、おれの父Hドセル。遅延の理由がショッピングとは、まるでママみたいだ。

「それで？ お昼はどこに予約してるの？」田を輝かせるローマン。

これで『どこも予約していない』と言つたら、どうなるだろ？

「歩き通しで腹が減ったな」とHドセル。本当にあんな、今日はマジでどこも予約してないんだ。

「どうしたのよ、ティーン。あなた顔が暗いわよ？」と、ローマン。

「お仕事で何か失敗でも？」

「いや、そういうわけでは……」

「何か食べれば元気になるわ」とHドセル。

「ええと……ちょっと待つて」まいったな。もうとにかくに着いててもいいはずなの。

携帯を取り出し、確認する。着信はない。

「何をそわそわしてるの？」ローマンが画面を覗き込んだ。「ポルもここへ来るとか？」

「ポールじゃなくて……」と、言いかけたところで、Hドセルがつぶやいた。

「ミニアム……」

おれとローマンは同時に顔を上げる。そこには仁王立ちした母の姿があった。よっぽど急いで来たのか、彼女の頬は紅潮している。エドセルを見つめ「あなた……」と言つたきり、次の言葉が出て来ない。

「ミニアム、いったい……どうしてここへ？」

Hドセルはそう言って妻に近寄りうとしたが、彼女は距離を詰め

よつとしなかつた。

「あなたつたら、こんな……」と、夫を睨む。「ティーンから電話をもらつたときは、まさかと思つたけど……」と言つて、息子を見る。都合おれまで睨まれた。こつちは何も悪いことをしてなつていつのに。

彼女がマイアミから飛行機でぶつ飛んできたのは、おれが“緊急事態だ”と告げたからだ。めつたに頼み事をしない息子が「すぐに来てくれ」と言えば、駆けつけるのが良い母親。いくらかオーバーに状況を説明もしたが、“緊急事態”であることは間違いない。ローマンから花が届いたんだから、執行猶予はあと半日つてところだ（ちなみにこれはすべてポールの企画提案であることは言つまでもない）。

「あなたはこんな……こんな若い男の子と……」ママはつめくつに声を発した。頬が赤くなつていては、どうやら急いでだからとうわけじゃなさそうだ。

「いい年をしてみつともな」と思わないの?— いつたい何を考えてこるの!?

「ミコアム……おれは……」

「なによつー?」

「そうじやないんだ。聞いてくれ

つろたえる父と、怒り狂う母。これはおれが初めて田の当たりにする夫婦喧嘩だ。自分が呼びつけたとは言え、心情的には男の方を応援したくなつてくる。と、そう思ったのはどうやらおれだけではないようだ。ローマンは間延びした口調で「ちよつとも」と口を挟んだ。「ねえ、ティーンのママ。何だか誤解があるみたいだけど、少し落ち着いて彼の……

「坊やは黙つてらつしゃこつ!—!—!」

叱咤一喝。ローマンは顔の横に両手を上げ、そろりそろりと後ろに下がつた。普段おばさんっぽい彼も、本物のおばさんには敵わないというわけか。もちろんおれはとつべのとうに後ろに下が

つてゐる。怒つた女性からはある程度の距離をとるのが、賢い男の選択だ（しかもそれが自分のママときたら尚のこと）。

「わたしはね、息子がゲイなのは別にいいのよ」と、おれを指さすママ。

「えーと、ここはおれの会社のロビーで、おれはまだ社内の誰にもカムアウトしてないわけなんだけど……まあ、いいか。続きをどうぞ。

「でも、なんだつてあなたまでゲイにならうつての？！ マンハッタンにいるからつて、急に宗旨替え？ 一週間もしないうちに、自分の息子と同じ年の男の子となんて……まったくあきれてものが言えないわよ！」

それにしても不思議だ。どうして女性つてのは、“あきれてものが言えない”と言ひながら、べらべらとまくしたてることができるんだろう？ いや、それはこの場面においてさほど重要な話じゃないか。オーケー、続きをどうぞ。

「そうじやないんだよ、ミリアム」エドセルは首を左右に振つた。
「おれがゲイになつただなんて……いつたいどうしてそんな話になるんだ？」

あ、ごめん。それはおれが大げさに言つたんだ。でもほら、あと半日後にはどうなつていたか分からなかつたわけだし。念のため、前もつてみたまでのことだ。

ママは厳しい表情で黙り込んでいる。両腕を胸の前で組み、目の中には炎。戦闘前のジャンヌ・ダルクか、街に赴かんとするゴダイヴァ夫人か。いずれにしても……閑話休題、続きをどうぞ。

エドセルは周囲に視線を泳がせた後、ふと思い出したよつて、手に持つたショッピングバッグに視線をとめた。「ええと……ほら、これを見て」そう言つて、中からエアキャップに包まれた何かを取り出す。「アンティークの壁掛けだ。素敵だろ？ ミリアム、これはきみのために買ったものだ。それにこつちは有名店のチーズケーキ。空輸でマイアミに送ろううと思つてた。あとはティファニーのア

クセサリーと……」

ヒドセルは手品師のよう、袋からいろいろなものを取り出して見せた。しかしママは腕組みをしたまま微動だにしない。はあ、やれやれ。おれはヒドセルに歩み寄つた。

「……父さん」肩に手を置き「女心がわかつてないな」と苦言する。「ママが聞きたいのはそんなことじやないよ。肝心の台詞、まだ言つてないだろ?」

父はおれの顔を見、それからぎゅっと唇を引き結んで、「ミコアム」と、田の前の小柄な女性に向き直つた。

「おれはこの通り、女心のわからない男だ。きみのことをわかりたいくと思つて、おれには何も……」と頭を軽く振る。「おれが理解できるのは、おれ自身のことだけなんだよ。それだって長く時間がかかる」とも多い。今頃になつてようやく理解したことば、おれが生涯で犯した重大な間違いについて……。それはミコアム、きみから離れてしまつたことだ。この過ちを許してくれなどとは言わない。だけど……」真つすぐに視線を向け、父は言つた。「きみを愛して、誰よつも。おれとまた一緒になつてくれ」

ふたりの視線が強くぶつかる。ヒドセルは妻を“見つめて”いたが、ミリアムの方は夫にガンを飛ばしていた。

「なんて自分勝手なの……」今しがた、愛の告白を受けたばかりの女性は、唸るようにつぶやき、そして突然「馬鹿つ!」と怒鳴り声を上げた。「あんたみたいな勝手な男と一緒になつてくれる女がいると思うの!?」

全身から電気を放出させるかのような叫び。この衝撃により、半径10メートル圏内の携帯電話がすべて壊れた。おやじぐ。

ママは疲れたように肩を落とし「いると思つ……?」と質問を繰り返す。「いやしないわよ……わたしの他には……」

「ミコアム……」そして夫は妻を抱いた。これでめでたし、ハッピーホンダ。およとトウが立つてゐるけど、なかなか素敵なラブシーンだ。

背の小さなママは、夫の胸にすっぽりと収まっている。こうして見ると、一人は長く連れ添つた夫婦のようだ。

「あなたの息子は素晴らしい」と、父。

「あんたの悪手よ」母。

ああ、そんなども「彼はおれを見て、そして言った。おれの……」

その眼差しを受け、おれはまたこの間、さんざんつぱら泣い

たといふのに またしても喉に熱いものがせり上がりつてきた。しかしこちらが決壊するより先に、溢れ出た奴がひとり。

「うわああああん！」

戻路を下りる中、やたらよく通るその声は、どうやら、と忘れてしまつたことを。

泣き叫びながら走り去るローマン。おれは慌てて彼を追いかける
しかし、その足の速いこと。オネエにしておくにはもったいないほど
の脚力だ。

三ツの口を以て、其の内に二つは火の口と、一つは水の口と、

「ハローハルと走ったとINIでなんとか追いっこことができた半ば強引に彼のシャツを掴むと、「ひっぱらなこでよつ！」と、おれの手をなぎ払う。ローマンは泣きべそ顔であるにも関わらず、しゃんと背を伸ばして立つてこる。一方こちらはまだ呼吸が定まらな

「さあ、どうぞ、お出で下さい。」

「どうせあたしは足が速いわよ!! 悪かったわね!!

「いや、それ会話になつてないだら……ともかく、ほんと、残念だ

つたな

樂しまじかになら、どうせ！ 愚の存分、覽ながれや！

「そんな」と細つてなごみ。ローマン、かわいがり

「そりやー、あたしは世界一かわいそうー、せつかく愛する人と出

会えたと思つたのにい！」

「ほらほらと涙を溢れさせるその姿は、まるで小さな子供のようだ。おれが知る限り、誰よりもハンサムなローマン。彼は涙を流すときも、きっと美しいのだろうと思つていたが、それはおれの買いかぶりだった。

「ほら、もう泣くな。Hドセルによく似たおれがここにいてやるから

「なによう！ あんたなんか全然ちがうんだから！ 彼の足下にも及ばないんだからあ！」

「はいはい、よしよし」おれはローマンを優しく抱きしめた。進んでハグするのは、もしかしたら初めてのことかもしれない。

「やだもう！ 觸らないで！」

「きみつて案外かわいいとこあるんだな

「ふん！ 捨てられ男を口説こうつたつてそろはいかないわよ！

今なら簡単に落ちると思ったら大間違いなんだから！」

「そうか、それは残念だ

「あんたなんか大っ嫌いなんだからね！」

「本当、残念……」

泣きわめくローマンを腕の中に揺らし、おれは初めて彼のことを本気で“愛しい”と感じていた。無論、恋愛とかそういうんではなく、何というか、身内に感じるような情愛だ。おれには男の兄弟はないが、もしいたらこんな感じなのかもしれない。

ローマンは自分の魅力について自信があり、自己プロデュースもお手の物。何でもわかっているかのよつとぶりと優雅な振る舞いで、常に上手に世渡りをしているよつと見える。しかし、そんな彼でも人生につまづくことはあるのだ。

おれとポールが結ばれたことが運命ならば、“おれとローマンが友達同士になる”というのも、また運命の一部だろつ。おれたちは出会い、そしてさらに知り合い、どうにうわけだか長続きしている。遠い昔、ミリアムとエドセルは結婚し、しばらく離れて暮らした

のち、またもくつこいた。そのことにどんな意味があるのかはわからない。ただ言えるのは、“それも運命の思し召し”。

おれたちはこの世界樹の下、ジタバタとあがき、悩みして、それでもどうにかこうにか進んで行く。過去の空白は埋めることができない。しかし、新しい時間を積み重ねることはできるだらう。ミツアムにも、ヒドセルにも、ローマンにも、ポールにも、そしておれ自身にも “これから”をどう生きるか。その時間はまだ残されている。今田のところはローマンにランチを齧つて、夜にもなればポールと一緒に愚痴を聞いてやる。明日は両親を連れてヨーロッパ・イランズへ観光だ。

これからをどのように生きるか あまつ先のことはわからぬ
いが、今日明日は、そんな感じでやつてこいつと熙へ。(といふで
Xつて……)

END

(後書き)

最後までお読み頂きありがとうございました。
もしよろしければ、ご感想など頂けると幸いです。

本作品は「Hピソード18：想いの行方（<http://ncode.e-syosetu.com/n6931i/>）」に続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3054h/>

ニューヨーク・ラブストーリー/エピソード17:愛はいつでも突然に(Crazy For
2011年8月15日03時24分発行